

高崎学検定講座

令和3年3月11日(土) 13:00~15:00
市民活動センター・ソシアス(市民ホール)

「おおこうち てる な大河内輝聲こうじゅんけんと黄遵憲 —明治初期の日中交流—」

高崎市歴史民俗資料館 学芸員 だいくはらみ ちこ大工原美智子

はじめに

最後の高崎藩主大河内輝聲は、新しい時代を積極的に取り込もうとする西洋好みのイメージとして描かれることが多い。ところが、さねとうけいしゅう実藤恵秀編訳『大河内文書』明治日中文化人の交遊に登場する輝聲は、隅田川を臨む広大な屋敷に移り住んで清国公使らと詩文を交わし、筆談を楽しむ漢学者としての姿であり、激動の幕末を生き抜いた藩主とはまるで正反対の静かな日々を送っていた。しかし、輝聲は明治15年(1882)数え35歳で他界しており、後半生といえるのはわずか10年ほどであった。

おおこうち てる な大河内輝聲(1848-1882) かえい嘉永元年10月15日(新暦11月10日)-明治15年8月15日。19代高崎藩主(のちに華族)、漢詩人。慶応4年(1868)8月17日(9月8日から明治元年)、松平氏を名乗る諸侯は本姓に返るよう命じられ、松平姓を改めて「大河内」に復す。明治3年(1870) てるあき輝照を「輝聲」と改める。

こうじゅんけん黄遵憲(1848-1905) どうこう道光28年3月24日(新暦4月27日)-こうしよ光緒31年1月20日(2月23日)。清末の外交官・詩人。明治10年(1877)11月3日から明治15年(1882)まで初代駐日公使の さんざん参贊(書記官)として来日。

1 筆談記録「大河内文書」の存在

明治8～14年(1875-81)にかけて大河内輝聲が中国人や韓国人と交流した筆談記録は、輝聲自身が収集整理し、長らく大河内家の菩提寺である埼玉県新座市野火止の平林寺にいぎのびどめ*へいりんじに保管されていたが、昭和18年(1943)に早稲田大学教授実藤恵秀さねとうけいしゅう(1896-1985)が調査して「大河内文書」と呼ぶようになった。

当初は100冊あったというが、調査時には71冊で、戦後に輝聲の子息輝耕氏きこうから大東文化大学と早稲田大学に分けて寄贈され、昭和33年(1958)11月に実藤氏が両大学のものをマイクロフィルム化した時には66冊に減っていた。昭和39年(1964)に実藤恵秀編訳『大河内文書』が平凡社から発行され、内容の一部が明らかとなったことから、その存在が広く知られるようになった。現在は、一部が大河内氏の遠祖源頼政まつよりまさを祀る頼政神社(高崎市)にも収蔵(『丁丑筆話』高崎市指定重要文化財)されていることがわかり、平成28年(2016)12月には『大河内文書』の全文(78巻76冊)を収録した王宝平主編『日本蔵 晚清中日朝筆談資料 大河内文書』浙江古籍出版社(全彩影印本套装共八册)が出版されている。

*平林寺 三河の吉田(今の豊橋)・上総の大多喜かずきおおたき・上州高崎の3つの大河内家の墓所

2 大河内輝聲の邸宅 桂林荘けいりんそう

明治初期の日中交流の舞台となったのは、駐日中国公使館、料亭のほかに、輝聲の邸宅「桂林荘」もその一つだった。

○『大河内文書』

【明治 10 年】（1877）輝聲 29 歳

浅草^{いまだ}今戸町 13 番地（現在は墨田公園の一部）に、りっぱな邸宅があった。門を入ると玄関脇に高さ 2 メートルぐらいの石があり桂林^{けいりんそう}荘（現在は平林寺）と隷書^{れいしよ}で浮彫になっている。広い庭園の入口にも風雅な門があつて^{ひじん}避塵門と彫付けた石が立っている。どの文字もこの家の主の筆である。

この屋敷は墨田川に面していて、座敷から舟の行き来やカモメの飛びたつ様がみられる。客間が大小 2 つあつて、大きなのを楽水閣と呼び、小さなのを^{かんが}観鵞齋と呼ぶ。主の書齋にも^{ばんおう}伴鷗楼と名を付けている。

2 階の 1 室はすっかり中国式。椅子やテーブルはいわずもがな、すべての調度が中国製のもので、壁にはあまたの^{つうれん}対聯が掛けてある。これで見ると、この家の主はよほど中国癖のある人とみえる。

主の歳は（数え）30、大河内輝聲といい、号を桂閣とよぶ。桂閣と呼ぶのは^{かえい}彼が^{もちづき}嘉永元年（1848）10 月の望月の日に生れたので^{*つき}月の桂^{かつら}にちなんだものである。桂林荘はその号から名づけたものであろう。その祖先は^{のぶつな}松平信綱、すなわち源氏であるから源桂閣と名乗ることもある。墨水逸人という号もある。

輝聲の先祖には文雅の人が多く、父^{てるとし}輝聴は「楽甫」と号し、祖父^{てるみち}輝充も書をよくした。輝聲から 5 代^{てるやす}遡る輝和は「聴雪」と号し、すこぶる文雅の人で、この屋敷の貴重な器具はほとんどが輝和の残したものである。座敷には祖先の筆跡が飾られ、遺伝的にもこの道を好んだわけである。

*月の桂 古代中国の伝説。^{せい}西河の^{ごごう}呉剛（桂男）という人が不老不死の仙人になるための仙法を学ぶという罪を犯し、天帝から月の中に生えている巨大な桂の木を斧で伐り倒すことを命じられた。その姿が月面に見えるという。

3 梅見の約束

○『大河内文書』

【明治 11 年】（1878）輝聲 30 歳

[3 月 15 日] この日は、木下川村きねがわに梅見に案内することになっている。約束通り、梅史ばいし・黍園しつえん・栞仙きんせん・勉騫べんけん・遵憲じゅんけん・枢仙すうせんの 6 人が馬車でやって来た。残念なことに輝聲は昨日からの風邪で医者から外出を禁じられている。そこで家令の高木といま一人兼右衛門というものに案内させて梅見に行かせた。

梅見を終えて帰るさ（時）に黍園しつえんがしきりに「植半うえはん、植半」と言うので、高木は一同を植半楼に案内する。さん吉という芸者を呼ぶ。この時一同連名で輝聲に迎かい（迎え）の手紙をよこす。輝聲はそれを見て夕方の風は肌にしみるから行かれないがどうか長夜ちやうやの宴を張って欲しいという手紙を書き房吉に持たせてやる。

植半では一同歓を尽くした。高木は一同を人力車に乗せて送る。高木は 6 人のつくった詩を持って帰る。輝聲は宝物を得たようにうち喜び整理して筆談集に入れたことは言うまでもない。

4 お気に入りの料亭「植半うえはん」

○『大河内文書』

植半は「千秋桜せんしゅうざくら」ともいう。木母寺もくぼじに向かって左隣。4 代前の主人が、芋いも、蜆しじみ、玉子焼きの料理を始め、次の代のお鉄という者が中々切れ者で、7 代目団十郎、杜若とじゃく（5 代目岩井半四郎）なども出入りしていた。お鉄の女むすめお菊の代（植半の主婆）に、植半は

純然たる料理屋になった。このお菊は気概があり、幕末の士が植半に会しても嫌な顔をせず、捕手の来るのも怖れずに庇護したため、時には官軍に捕縛され、刀を目の前に突き付けられることもあったが泰然として動かなかった。後に次男と共に「中の植半」を開店し、長子は半右衛門の後を継ぎ家運隆盛であった。

「中の植半」が出来てからは本店を「奥の植半」といった。輝聲が行くのはいつも「奥の植半」だった。ここの名物は、里芋・しじみ汁・玉子焼き。座敷は階上6、階下4のほか、南・中・奥と離れがあり、その庭園は「栽籠繁く、潮入の池あり、立石燈籠の配置。関屋の入江、垣に漣打寄せて、遠く真乳山（浅草の待乳山聖天の周辺）扱ては金竜山（浅草寺）の寺影塔影を望み、舞妓を携へ家根船にての来客もあるべし。往昔蜀山人植半に遊びて、転寝の夢覚めて、夕間暮富士の根を霞の間に眺めて、何の意もなく筆を執りて、障子に書く

すみだ川此夕ぐれに富士のねを

見るとは悠にいたるときもなし」



明治時代はここが文人墨客の好んで集まるところとなった。筆談ではここがしばしば使われる。

* 蜀山人 (1749-1823) 江戸中期・後期の狂歌人、戯作者、学者。下級武士でありながら文化人。大田覃、南畝は号。

安藤広重の浮世絵『名所江戸百景』「木母寺内内川御前栽畑」

料亭「^{うえはん}植半」は、隅田川上流左岸、支流の内川沿いに現存する^{もくぼじ}木母寺の境内にあった、植木屋から高級料亭になった。明治時代の代表的な料理屋で、落語「花見小僧」に登場し、安藤広重の浮世絵『名所江戸百景』の「木母寺内川御前裁畑」にも描かれている。「^{うえはん}植半」は^{植木屋半右衛門}を主とし、八ツ頭芋としじみ料理を売り物にした評判の料理屋だった。「^{ごせんざい}御前裁畑」として知られ、四季の野菜を将軍家の御膳に献上していた。

*落語「花見小僧」…商家の娘と手代の恋物語「おせつ徳三郎」の前半部分を「花見小僧」、後半部分は「刀屋」という。おせつと徳三郎が花見に出かけたときの様子を小僧に聞き出し、激怒した商家の主人は、徳三郎に暇を出して二人の仲を引き裂き、おせつに婿を取る話を進めた。

5 ついに実現！桜の花見

明治11年（光緒3年 1877）4月16日、当時清朝であった中国が初めて日本に派遣した駐日公使官員40名は、^{おおこうちてるな}大河内輝聲が準備した日本風の花見を楽しんだ。当時の日本の漢学者や漢詩人たちは、清国公使館員たちと交流したいと願って接触を求める者が多かったが、^{てるな}輝聲は特に熱心で隔日のペースで公使館を訪ねて交流を重ねていたことから中国人からも信頼される存在だった。

正使何如璋^{かじょしょう}をはじめとする公使館員たちが心待ちにしていた桜の花見は、その後、書記官（^{さんざんかん}参贊官）^{こうじゅんけん}黄遵憲と^{てるな}輝聲が日取りや場所を綿密に打ち合わせて実現したのである。

○『大河内文書』

[4月16日]輝聲は朝早くから目を覚ました。今日の日を何と長いこと待っていたことだろう！今日の日のご案内をいくど中国人にむかってしたことだろう！招かれた中国人よりも一層待ち焦がれたのは招いた主大河内輝聲であった。

庭のこずえでは雀がチチチとさえずっている。今日は雨上がりの快晴である。輝聲の胸はわくわくする。何くれと下女下男を指図して準備に抜かりのないようにする。内村^{すいしよ}綏所が接待のために来てくれた。

午後1時、輝聲の邸宅「桂林荘」の門前に清国公使館の馬車数台が着く。何如^{かじよしやう}璋（清国駐日公使）、張^{ちやうしけい}斯桂（清国駐日副公使）、^{*こうじゆんけん}黄^{りやうすうせん}遵憲（参贊＝書記官）、^{はんべんけん}廖^{おうろう}枢仙（公使随員）、^{はんべんけん}潘^{おうろう}勉騫（公使随員・翻訳官）。そして加藤^{おうろう}桜老（京都大学准博士・湊川神社宮司）、内村^{すいしよ}綏所（漢学者）と大河内輝聲。屋敷から舟に乗り、向島の花見の案内をする。

向島についた一同は、まず、桜の堤を散歩、やや疲れたころ、桜老の案内で白鬚神社のかたわらの茶店で休む。それから隅田村の方を散歩して引き返すと、白鬚神社の前で^{おうしつえん}王^{きんせん}黍園・^{きんせん}菜仙が待っていた。これで人数が揃ったので、作詩の会場となる^{うえはん}料亭「植半」に行く。植半に向かってすぐ右が^{うめわか}梅若の堂。植半に上がる前、これを見たのはいうまでもない。

日本の暮らしの中で、黄遵憲は日本固有の美意識を発見したが、特に「桜の花見」は、墨江（隅田川畔）に暮らす大河内輝聲の影響が大きかった。在日期間中は毎年欠かず花見をし、桜を題材に詩文を残した。遵憲はこの花見のときにもあらゆるものに興味を持ち、花見に集まる日本の学者や文人と交流して、知識や考え方を知った。階下の太神楽や1里にもわたる見渡す限りの桜、そして八重桜など、何事にも突っ込んで聞く。これはやがて日本の概略を報告した『日本雑事詩』を作る基になった。

輝聲「桜は遠くから眺めるよりも、近くで眺めるものです。この家は宏麗こうれいで、女中に醜いのはおりません。どうかゆるゆると、墨堤ぼくの野菜でもめしあがって下さい。」

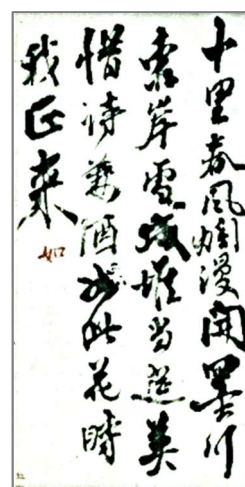
(植半自慢の料理であるしじみ汁と玉子焼きが出る)

*桜老「今日のこの盛会! 和漢席をおなじくしたのは、天地開闢かいびやく以来の一大盛事です。しるして千万世につたえるべきです!」桜老のこの気炎きえんにたいし輝聲「桜老東西 桜老東西 桜老東西」と朱筆をいれている。

*加藤桜老かうろう(1811-1884) 常陸(茨城県)笠間藩士。本姓は佐藤。名は熙ひろい(有隣)。字は伯敬。別号榊蔭しんいん。

如璋

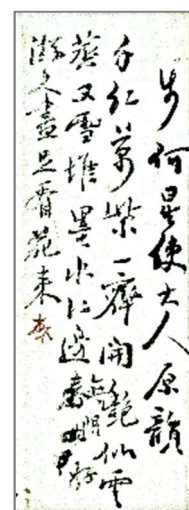
十里春風爛漫開 十里の春風に 爛漫と開く
 墨川東岸雪成堆 墨川東岸 雪 堆をなす
 當筵莫惜詩兼酒 筵むしろに当りては 惜むなかれ 詩と酒を
 如此花時我正來 此の如き花の時 我正に來れり



黍園

(何公使の原韻をふんで)

千紅萬紫一齊開 千紅万紫 一齊に開く
 艷似雲蒸又雪堆 艷として雲蒸し 又雪堆るに似たり
 墨水江邊無限好 墨水江辺 限りなく好し
 游人盡是看花來 遊人は 尽ことごとく是れ花を看みに來る



絶勝西園雅會開
 似雲堆櫻堤休作桃源認
 爲賦淵明歸去來

輝聲

絶勝西園雅會開 絶勝の西園に 雅会ひらく
 春花爛漫似雪堆 春花爛漫 雪の堆るに似たり
 櫻堤休作桃源認 桜堤作すをやめよ 桃源と認むることを
 爲賦淵明歸去來 爲めに淵明の歸去來を賦まん

* 陶淵明の歸去來辞 5世紀初頭(405)頃成立。全編240余字(60句)。東晋の詩人陶淵明の代表作。六朝散文文学の最高傑作の一つとされる。官を辞して帰郷した淵明が、自然を友とする田園生活に生きようとする自由な心境がうたわれている。

斯桂

向島春深一路香 向島春深くして 一路香ばし
 香車絡繹往來忙 香車絡繹 往來忙し
 淡紅淺白天然麗 淡紅淺白 天然麗し
 妒煞樓頭粉黛妝 樓頭粉黛の妝を 妒煞(殺)せしむ

向島春深一路香
 香車絡繹往來忙
 淡紅淺白天然麗
 妒煞樓頭粉黛妝

別擅風流紅粉香
 茂卿載酒爲誰忙
 春江如鏡花如面
 點綴斜陽試晚妝

輝聲 (輝聲は また斯桂の 韻にあわせて)

別擅風流紅粉香 別に風流を 擅にし 紅粉香し
 茂卿載酒爲誰忙 茂卿 酒を載す 誰が爲に忙し
 春江如鏡花如面 春江は鏡の如く 花は面の如し
 點綴斜陽試晚妝 斜陽を点綴し 晩妝を試む

* 茂卿 荻生徂徠(1666-1728)江戸前・中期の儒者。名は双松、字は茂卿。通称惣右衛門、別に護園。5代将軍徳川綱吉の学問相手。柳沢吉保に仕え、8代将軍徳川吉宗に「政談」を提出し、政治にもかかわる。三河物部氏を先祖とし、修姓して「物」とも称したことから、「物茂卿」ともいう。

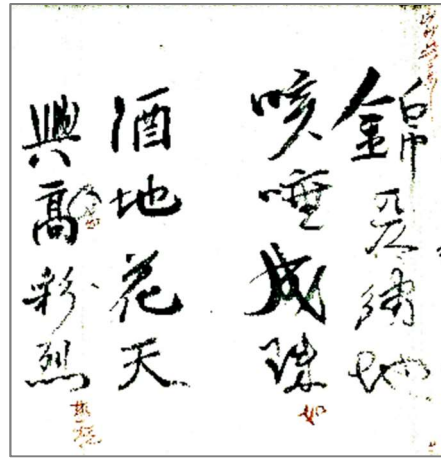
すっかり酔いがまわった両公使は、この筆談で他にはない大きな字を書いた。

如璋

錦 天 繡 地 錦天しゅうち 繡地
咳 唾 成 珠 咳唾がいたま 珠を成す

斯桂

酒 池 花 天 酒池 花天
○
興 高 彩 烈 興高く 彩烈し

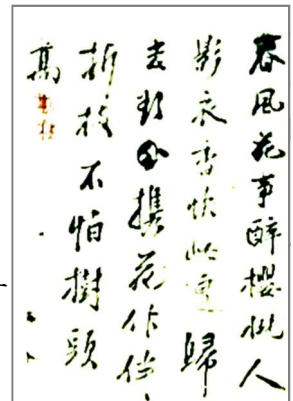


*咳唾珠を成す 『語漢書』「趙壹伝」。趙壹「刺世疾邪賦」から。趙壹は後漢末の官吏・文人。詩文の才が非常に優れていることのたとえ。ふと出た言葉も、珠玉のように美しいものである。他人の言葉を敬っていう語。

漆園が如璋に韻を決めてもらいたいと頼み、右の斯桂の「高」の字の横に○を付けた。如璋が「高」に決めたので、斯桂が韻をふんですぐに、

斯桂

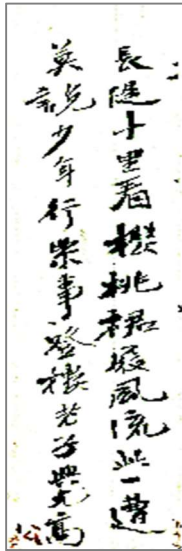
春風花事醉櫻桃 春風花事 桜桃に酔ふ
人影衣香快此遭 人影衣香 此そうの遭快し
歸去欲携花作伴 歸去 花を携えへて 伴と作さんと欲す
折枝不怕樹頭高 枝を折るに 樹頭の高きをおそ恐れず



如璋

飛觴不惜醉藩桃 觴さかずきを飛ばし 藩桃に酔ふを辞せず
海外看花第一遭 海外に花を見る 第一遭
有客正吹花下笛 客あり 正に吹く 花下の笛
陽春一曲調尤高 陽春一曲 調もつとも尤高し





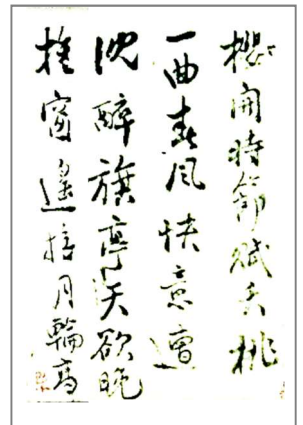
遵憲

長隄十里看櫻桃 長隄十里 櫻桃を^み看る
 裙屐風流此一遭 裙履^{くんり}風流 此の一^{そう}遭
 莫說少年行樂事 說^いふ^{なか}莫れ 少年行樂の事
 登樓老子興尤高 登樓の老子 興^{もっと}尤も高し

*登樓の老子 若者が遊ぶのをとやかく言っではいけない。
 酒樓の上の老人が一番楽しんでいる、ということ。

栞仙

櫻開時節賦夭桃 桜開く時節 夭桃^{よう}を賦す
 一曲春風快意遭 一曲春風 快意^あに遭ふ
 沈醉旗亭天欲暁 旗亭に沈酔し 天^あ暁けんと欲す
 推窓遙接月輪高 窓を推し 遙かに接す 月輪の高さに



輝聲

墨堤十里放鶯桃 墨堤十里 鶯桃^{おうとう}を放つ
 詩酒來遊快此遭 詩酒來遊し 快たり此の^{そう}遭
 博得筆筵才子賦 博し得たり 筆筵才子の^ふ賦
 洛陽紙價一時高 洛陽の紙価 一時高し

*鶯桃^{おうとう} 桃に鶯を放つ。「桃に鶯」でないと、木(氣)が違うと
 いう洒落^{しゃれ}。

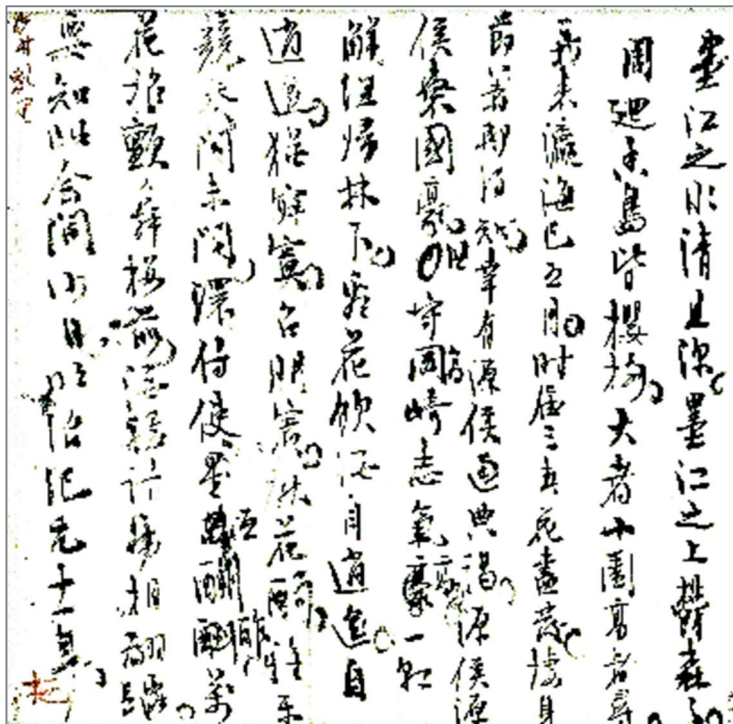
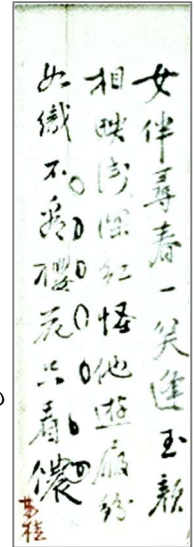
*洛陽の紙価 「洛陽の紙価たからしむ」。晋の左思^{さし}が三都賦
 を造った時、これを写す人が多く、洛陽では紙の値が高くなったという『晋
 書』文苑伝にある故事。著書が評判となり、盛んに売れて読まれること。著
 作物が広くもてはやされて、盛んに売れること。

左思…西晋の詩人 (205?-305?) 著書の評判がよく、売れ行きがよいこと
 のたとえ。

「高」の韻をふむのはここまでで、さらに自由に、

斯桂

女伴尋春一笑逢 女伴春を尋ね 一笑して逢ふ
 玉顔相映淺深紅 玉顔相映ず 淺深の紅に
 怪他遊屐紛如織 怪しむべし 他の遊屐 紛として織るが如きも
 不看櫻花只看儂 桜花をば看ず 只だ儂かれを見る



枢仙

墨江之水清且深 墨江の水 清く且つ深し
 墨江之上鬱森々 墨江の上 鬱森々
 周廻香島皆櫻樹 香島を周回するは 皆な桜樹
 大者十圍高者尋 大なる者は十圍 高き者は尋
 我来瀛海已五月 我れ瀛海えいかいに來りて すでに五月
 時届三春花盡發 時は三春いたに届り 花盡く発く
 棲身節署何得知 身を節署ひそ(公使館)に棲め なんぞ知るを得ん
 幸有源侯通典謁 幸に源侯あり 典を通じて謁す
 源侯源侯東國豪 源侯源侯東國の豪

世守高崎志氣高	世々高崎を守り 志氣高し
一朝解組帰林下	一朝解組し 林下に帰る
看花飲酒自逍遙	花を看 酒を飲み 自ら逍遙す
自逍遙 猶寂寞	自ら逍遙して 猶ほ寂寞
召朋賓 就花酌	朋賓を ^{まね} 召き 花に就いて ^く 酌む
雅樂競奏聞未聞	雅樂競ひ奏し 未だ聞かざるを聞く
環侍使星互酬酢	使星に環侍して 互に ^{しゅうさく} 酬酢
萬花招顫舞櫻前	万花 ^{せうせん} 招顫して 桜前に舞ひ
酒龍詩虎相翩躚	酒龍詩虎 相 ^{へんせん} 翩躚す
要知此會開何時	此の会 何れの時開きしを知らんと ^{ほつ} 要すれば
明治紀元十一年	明治紀元十一年

中国人たちは帰り支度にかかる。桜老はなおも興奮さめやらず、

桜老「花を見て来り、月を踏みて帰る。まさにゆるゆると闊歩すべきのみ。この興は尽きず、この興は尽きず、この興は尽きず……」

6 風雅の極み にほんざつじし 日本雑事詩初稿塚

駐日公使たちは、日本と中国とを比較し、日本の明治期と同時代に危機を迎えた中国を救うため、当時の日本がどのように江戸から明治への転換を行うかという事情について研究していた。特に参贊（書記官）黄遵憲は、中国を今後どうすべきかを考える材料にするために日本の歴史やあらゆる方面のことを研究し、「日本国志」に書きまとめようと決心した。この大事業には時間を要するため、まず日本の概略として着任後2年ほどで書き上げたのが明治13年（1879年）出版の『日本雑事詩』である。この中に日本の桜と花見の詩が収録されている。

[参考]黄遵憲著『日本雑事詩』実藤恵秀・豊田穰訳 平凡社 昭和43年(1968)

○『大河内文書』

【明治 12 年】（1879）輝聲 31 歳 春

黄遵憲の『日本雜事詩』の原稿が完成。輝聲は感激して初稿を家に残したいといった。遵憲も劉蛻の文塚、懷素の筆塚にならって日本の地に初稿を埋めておきたいといい、輝聲も喜んで、邸内に円筒形で高さ 1 メートルあまりの日本雜事詩初稿塚をつくった。題字は遵憲、碑文は輝聲筆の碑を建て、9 月に詩友を呼んで祝った。

* 劉蛻 唐代、未開の荒地荊州で初めて科挙に合格した人物。「破天荒」の故事の由来となった。

* 懷素 唐代の書家・僧。穂先の擦り切れた筆「秃筆」が山をなし、筆塚を作って供養したという。

* 日本雜事詩初稿塚 現在は平林寺に移され、石碑は仏殿のうしろ、本堂の前の関係者以外は立ち入れないところにある。高さ四尺ばかり、まるい棒形、巻煙草をマッチ箱の上に立てたような恰好である。黄遵憲の字で「日本襟事詩最初塚」とあり、「葬詩塚碑陰誌」として、そのいわれが彫り込んである。

『日本雜事詩最初稿塚』陰誌（裏面の碑文）

これは、黄遵憲の詩を葬るための塚である。遵憲は、姓は黄氏、名は遵憲。清国粵東（広東）嘉応州出身の挙人。明治 10 年、公使について参贊官として東京の公使館に來た。雋敏曠達な性質で智略があり、文章が上手である。公務の暇には、我が国の書籍を読んだり、我が国の古老に聞いたりして、風俗や逸事を聞き集めて日本雜事詩百余首を著した。

ある日、私を訪ねて来て、その原稿を見せてくれた。これを見ると、すべて七言絶句で、それぞれ一つの題目を読み、その後

明治一二年『日本雜事詩最初稿塚』裏面の碑文(天河内輝聲筆)
葬詩冢陰誌

是為公度葬詩冢也公度姓黃氏名遵憲清國粵東嘉應州舉人明治丁丑隋使來東京署參贊官性雋敏曠達有智畧能文章退食之暇披覽我載籍咨詢我故老采風問俗搜求逸事著日本雜事詩百餘首一日過訪携稿出示余披誦之每七絶一首括記一事後系以註考記詳談上自國俗遺風下至民情瑣事無不編入咏歌蓋較江戶繁昌志扶桑見聞記亡加詳焉而出自異邦人之載筆不更有難哉余愛之甚乞藏其稿於家公度曰否願得一片清淨壤埋藏是卷殆將效劉蛻之文冢懷素之筆冢也乎余曰此絶代風雅事請即以我園中隙地瘞之遂索公度書碑字命工刊石工竣之日余設杯酒邀公度弁其友沉刺史様戸部王明經昆季同來赴節酒半酣公度盛稿於囊納諸穴中掩以土澆酒而祝曰一卷詩兮一杯土詩與土兮共千古乞神物兮護持之葬詩魂兮墨江澌余和之曰咏瑣事兮着意新説記舊聞兮事二真詩有靈兮土亦香吾願與麗句永為隣沉刺史等皆有和作碑隘不及刊明治己卯九月桂閣氏撰并書

廣羣在刻

注が詳しく入れてある。我が国の昔のことから今の世間の細かいことまで、すべて詠み込んである。かの江戸の儒者寺門静軒著『江戸繁昌記』6巻 天保2年(1831)刊、源頼朝の近臣伝入江広元著『扶桑見聞(私)記(大江広元日記)』76巻よりも、もっと詳しい。ことにそれが異邦人の筆になるとは、誠に珍しいことである。私は、これが気に入ったので、その原稿を我が家に蔵しておきたいと頼んだ。公度(遵憲)はいった「いや、願えることなら清浄な土の中に、この原稿を埋めておきたい、あの劉蛻の文塚のように、^{うず}懷素の筆塚のように一。私はいった。一それこそ世にも風雅なことです。どうか、私の家の庭の空地に埋めてください。

こういう訳で、公度（^{こうど} 遵憲）に碑の題を書いてもらい、石工に彫らせた。出来上がると、私は酒席を設け、公度（^{こうど} 遵憲）とその友、沈刺史（^{しんしし} 梅史）・楊戸部（^{ようこぶ} 守敬）・王明経兄弟（^{しつえん} 棗園・^{きんせん} 棗仙）を招いた。酒がややまわった頃、公度（^{こうど} 遵憲）は原稿を袋に入れて穴の中に納め、土を被い、酒を注いでこれをまつっていわく、
*^{きよじん} 拳人 中国の明・清代に科挙（官吏登用資格試験）の郷試（^{きょうし}）に合格し、進士の受験資格を得た者。

黄遵憲

一卷詩兮一杯土 一卷の詩 一杯の土
詩與土兮共千古 詩と土とは 千年も共にあれ
乞神物兮護持之 神物に乞うて 之を護持せん
*^き 葬詩魂兮墨江漣 詩魂を葬る 墨江のほとりに

*「葬詩魂兮墨江漣」 石碑はもともと浅草今戸町14番地にあったが、輝聲の長男大河内輝耕氏（^{きこう}）が山の手に移すときに、今後もまた引越すとも限らないので、父親が折角大切にしたものの子孫がなくしては申し訳ないので、ということで埼玉県新座市野火止の菩提寺である平林寺に移した。

大河内輝聲

咏瑣事兮着意新 ^{きし} 瑣事を咏じ 着意あらたなり
記舊聞兮事事新 旧聞を記し 事々あらたなり
詩有靈兮土亦香 詩に靈あり 土亦た香ばし
吾願與麗句兮永為隣 吾願わくば 麗句と永く隣をなさん

^{ちんしし} 沈刺史なども、すべて和韻した。この碑が狭いので、載せることができないが・・・。

明治己卯（明治12年）九月

桂閣氏（輝聲）撰ならびに書 広群鶴刻す」

7 黄遵憲こうじゆんけんが見た日本の桜と花見

①日本の桜と日本人の花見

桜花 一

朝曦あさ看到夕陽み斜せきよう 朝曦あさより看みて 夕陽せきよう斜せきようなるに到いたる

注1 流水游龍鬪寶車た 流水游龍 宝車たを鬪たかわす

注2 宴罷紅雲歌絳雪こうせつ 宴罷やみて 紅雲こうせつに絳雪こうせつを歌う

東皇第一愛櫻花はるのかみ 東皇はるのかみ（春の神）第一に桜花を愛す

注1 流水遊竜は「後漢書」明德皇后紀の「車は流水の如く、馬は遊竜の如し」とあるのにもとづく。

注2 陸龜蒙の「江南道中」詩に「桂父旧歌飛絳雪、桐孫新韻倚元雲」とある。

【黄遵憲のコメント】

桜花は*五大部洲*にないものである（桜は日本以外五大州にはない）。深紅なのがあり、薄赤なのがあり、白いのもある。一重から八重まであって、あでやかさの限りだ。もの（果実）は桜桃ゆすらに似ているが、花はずっと美しい。他の樹に接木したため、姿もまたかく変わったのかもしれない。三月の花のころには、むかしは公卿くぎようひやつかん百官、みないとまをいただき、花を賞した。今でも車をつらね、馬にうちのり、男女これにあつまり、国をあげて狂せんばかりである。日本人はこれを花の王という。隅田川の左右に数百本あって、雪か霞か錦か茶かやかと、あやしまれる。わたしは、月あかるき晩、二度もそこにあそんだが、まことに、わが身を蓬萊ほうらいにあそばせるような思いがした。

東京で名勝としてきこえるのは、木下川の松・日暮里の桐・亀井戸の藤・小西湖しのばずのいけの柳・堀切の菖蒲・蒲田の梅・目黒の牡丹たきのかわ・竜川の紅葉で、これらはみな良辰美景りょうしんには、遊山の人の雑踏するところである。

*五大部洲 仏教的宇宙観。須弥山を中心として、東西南北に位置する4つの島を四大部洲という。

*隅田川の桜 江戸の桜の名所は、隅田川の堤防ぼくてい（墨堤）・上野・飛鳥山・御殿山だった。墨堤の桜の歴史は「墨堤植桜之碑」に書かれている。4代将

軍徳川家綱が常陸国の桜際の桜を移植したのがはじまり。8代将軍吉宗が100本の桜を墨堤に植えて地元の名主に管理させた。当初は上流に植えられていたが、徐々に下流へと植えられるようになった。

② 諺 「花より団子」

桜花 二

搏花作飯勝胡麻	花を <small>まるく</small> 搏して飯を作り	胡麻 <small>ごま</small> に勝る <small>まさ</small>
嚼薬流酥更点茶	薬 <small>しべ</small> を嚼み <small>か</small> 酥 <small>さけ</small> に流し	更 <small>さら</small> に茶に点ず
費尽揆莎纒結果	揆 <small>もみこねること</small> 莎をなし尽して	はじて結果 <small>できあがる</small>
果然団子貴於花	果 <small>はたせるかな</small> 然団子は花よりも	貴し

【黄遵憲のコメント】

桜飯なるものを売っている。桜を飯にまぜたものである。桜餅なるものを売っている。花をまるめてもち餠として、ゆでたりむしたりしたものである。「花より団子」という諺ことわざがある。桜茶なるものを売っている。桜を湯に点じ、少々塩を入れる。酒の酔をさますといわれる。花の枝を帽子にはさんだり、また袖につつんだり、帯にぶらさげたりする。遊客のかえるときには、町中がみな花というわけである。

③ 悲劇の主人公梅若丸

梅若の墓

殿春花事到将離	殿 <small>ばんしゅん</small> 春の花事	まさに離れんとするに到る
雲似人愁水似思	雲は人愁に似て	水は思うに似たり
一尺落花和涙雨	一尺 <small>おおく</small> の落花	涙雨 <small>なみだあめ</small> に和す
手添香土弔梅兒	手に香土を添えて	梅兒 <small>うめわか</small> を弔う

注1 黄遵憲が日本にいたころ、文人墨客のあそび場は、上野にあらざれば墨堤であった。いま東京人にわすれられんとしている木母寺、百花園など、清国人にはいと親しまれたものである。

【黄遵憲のコメント】

隅田川の左右の堤には桜花が数百樹ある。木母寺もくぼじのかたわらに一つの墳墓があって、梅若の墓という。伝説（異説もある）によれば、むかし美人梅若（黄遵憲は梅若丸を美女としている）というものが、3月15日にここで死んだので、この日には雨がふるといふ。いっばんには、これを涙雨とよんでいる。風流人が花見をする時には、きまってこの墓注1にお参りをする。

***梅若の墓** 当時の文人墨客の遊び場は墨堤であった。隅田川の兩岸の堤には桜花が数百本あり、木母寺や百花園は特に清国人に親しまれた。木母寺に梅若の墓というのがあり、平安時代の貞元元年（976）、京都で人買ひとかいにさらわれて奥州に向かう道中にこの地で亡くなった梅若丸という12歳の子供と、その子を捜して旅に出た母親にまつわる「梅若伝説」があり、梅若を弔って梅若塚が設けられ、その傍らに木母寺が創建されたという。毎年4月15日（旧暦3月15日）を梅若の命日として法要が営まれている。この日には必ず雨が降り、これを「涙雨」と呼んで、風流人が花見の時に決まってこの墓にお参りをした。

8 輝聲の墓前の碑—舌談は きえるが 筆談は消えず—

【明治15年】（1882）輝聲34歳（数え35歳） 8月15日没。大河内三家の菩提所野火止のびどめの平林寺に埋葬される。墓前の碑文の篆額がくは太政大臣の三條実美*さんじょうさねとみ、撰文は漢学者の龜谷省軒*かめたにせいけん。

君は天資敏捷てんしびんしょう、文辞を美しくし、筆礼にたくみなり。詩韓筆話百卷、家に蔵す。君は之と酬唱しゅうしょう文字の飲をなし、ほとんど虚月なし。いくばくもなく、梅史は憂あに丁いて去り、枢仙すうせんは神戸領事となり、公度（黄遵憲）兄弟は米利堅あめりかに赴き、何張二公使かちょうは任満ちて国にかえる。しかして君は道山に帰り矣。

*三條実美さんじょうさねとみ（1837-1891）幕末・明治の公卿・政治家。尊攘派公卿の中心人物

*龜谷省軒かめたにせいけん（1838-1913）幕末・明治時代の武士、漢学者。岩倉具視に仕えた